熊野屋敷遺跡

福岡県筑後市大字熊野所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第 101 集

2012

筑後市教育委員会

熊野屋敷（くまのやしき）遺跡第５次調査

2012

筑後市教育委員会

序

熊野屋敷遺跡は、松原校区に位置し、天台寺院である坂東寺や熊野神社を中心とした伝統ある地域に存在します。

今回の調査は、最澄開基と伝えられ、1000 年以上の歴史を誇ると考えられている坂東寺の境内で行った３度目の埋蔵文化財発掘調査であります。

調査からは寺を囲うようにした土塁や堀なども確認され、また、中世期の石塔なども出土し、坂東寺の歴史を裏付ける貴重な発見となりました。

歴史を顧み、先人たちの技術や知恵を学び得ることは、現代人である我々が現在の生活に役立てることは勿論、希望ある未来へ伝え残さなければならない責務でもあります。

本報告にあたり、坂東寺並びに関係者各位に文化財へのご理解、ご協力を賜った事を深く感謝申し上げます。

平成 24 年３月

筑後市教育委員会
教育長　高巣　一規

例言

1. 本書は平成 23 年度に筑後市教育委員会が行った熊野屋敷遺跡第 5 次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。

3. 本書に使用した図面の遺構図は上村英士が作成し、遺物の実測、浄書、製本を株式会社アーキジオ九州に業務委託し、業務委託に関しての監理及び管理は筑後市教育委員会が行った。

4. 本書に使用した遺構写真撮影は上村が行い、遺物の写真撮影は株式会社アーキジオ九州に業務委託した。

5. 今回の調査に用いた測量座標は日本測地系第 2 座標系を基準としている。

6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002 に準拠している）。
   SD－溝　　SK－土壙　SP－ピット　SX－不明遺構

7. 本書の執筆・編集は上村が行った。

目次

Ⅰ. 調査経過と組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ. 位置と環境 ・・・ 1

Ⅲ. 調査成果 ・・ 3
（熊野屋敷遺跡第 5 次調査）

Ⅳ. まとめ ・・11

写真図版
抄録

Ⅰ.調査経過と組織

熊野屋敷遺跡第5次調査は筑後市大字熊野字屋敷1012-1に所在する。平成23年4月8日に開発原因者である坂東寺住職皆木寂俊氏より納骨堂建設よる予備調査依頼書が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課社会教育係による現地での確認調査を実施した。確認調査の結果、当該地全域で遺構が確認され、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、開発原因者から平成23年6月9日に埋蔵文化財発掘調査依頼書及び文化財保護法第93条による発掘届が提出され、平成23年6月21日に「熊野屋敷遺跡第5次調査埋蔵文化財発掘調査」として開発原因者と筑後市で本調査の受託契約を締結した。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

1）平成23年度

総括	教育長	高巣　一規
	社会教育課長	高井良清美
	社会教育係	
	（文化スポーツ担当係長）	村上　一彦
	（文化財担当職員）	小林　勇作
		上村　英士（確認・本調査担当）
		吉村由美子

Ⅱ.位置と環境

・地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、潅漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

・歴史的環境

今回報告する熊野地区は市のほぼ中央に位置し、近年は宅地化が進行し市街化している地域である。

坂東寺は延暦年間、最澄開基という伝説を持ち、本尊は薬師如来である。

（文献史料）

文献資料での坂東寺は、延応元年（1239年）十月二十日の熊野神社鳥居立注文写に「大工坂東寺住人藤四郎」と見えるものが初見である。ただし、この「坂東寺」は寺号か地名かは判断できない。寺号としては天福二年（1234年）二月の広川荘名田所役注文写に「舎坊地七拾四ヶ所　神宮寺　安福寺　二十二ヶ所　坂東寺　広福寺　五十二ヶ所　」と見えるのが確実な初見である。

坂東寺の成立については諸説あるが、保延四年（1138年）に広川荘が熊野社領になった頃、熊野神社が勧請され、神宮寺として創建されたと考えられる説、また、元弘四年（1334年）広川荘々官ら連署状写に「久安三年（1147年）八月若宮王子社造立、元久二年（1205年）七月□日西御前社造立･･･其後建長二年（1250年）御造営之時、為三社一宇十一間」とあり、三社一宇にした建長二年（1250年）頃を熊野神社の成立と考える説などがある。

また、坂東寺史料としては、明応元年（1492年）に成就院法印信覚が後代のために、以前からの証

文などを一巻に書き注した『坂東寺縁起』が残されている。

（有形文化財）

坂東寺境内には県指定有形文化財の「坂東寺石造五重塔」がある。凝灰岩で造られ、総高 276.6 ㎝である。基壇石の東側面には中央に梵字、左右に仁王像が彫され、西側面には「奉造立五重塔　大勧進□所物　刑部丞中原為明　貞永元年□辰□　彼岸日」と陰刻されている。貞永元年（1232 年）銘は筑後地方では最古の銘をもつものであり、鎌倉時代の様式を伝える石造塔である。

楼門には仁王尊があり、慶長十五年（1610 年）に筑後国領主である田中吉政に修理を依頼した記録が残っており、それ以前には存在したものと考えられている。

(無形文化財)

現在、熊野神社で行われる県指定無形民俗文化財の「鬼の修正会・追儺祭」は藩政頃まで坂東寺で行われていたもので「坂東寺鬼の修正会」と呼ばれていたものである。起源については､明応二年（1492 年）二月成就院法印信覚の法会次第書に「正十日鬼修会」とあり、毎年旧正月十日の年中行事として継承されてきたものである。祭の神事は「小松明」「鬼追い」「大松明」の３つで構成され、「鬼追い」は氏子のみで行われる非公開の神事である。「大松明」は長さ 13 m、直径 1 m、重さ 500 ㎏の大松明を三本準備し、午後 10 時に小松明から点火し、大松明を刈又といわれる棒で支えながら綱で社殿を３周引き回し、鬼を追い払い、無病息災と豊作を祈願する伝統行事である。

参考文献

『筑後市史』第２巻　1995　筑後市

『筑後松原郷土史』1988　筑後郷土史研究会

『筑後市の文化財』2004　筑後市教育委員会

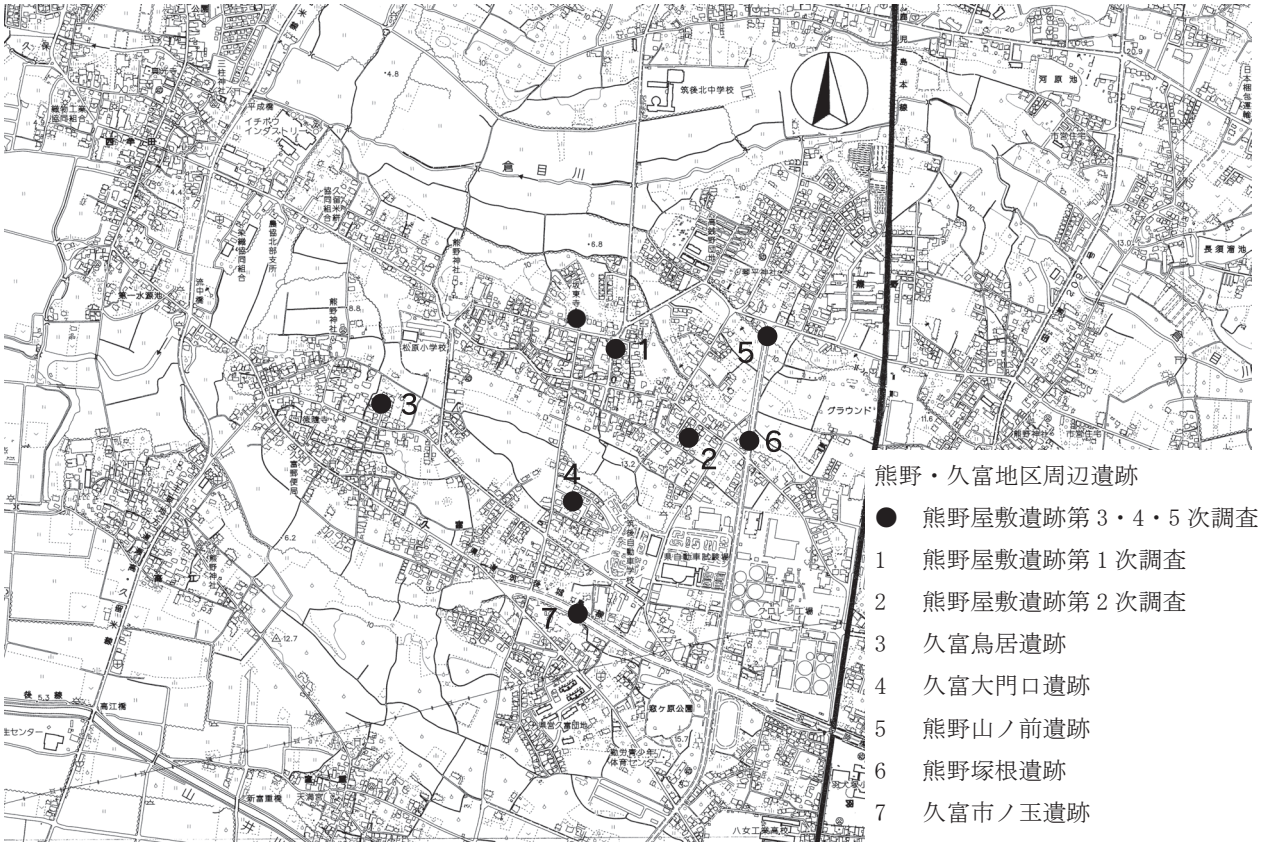


Fig.1　周辺調査地点位置図（1/20000）

Ⅲ . 調査成果
（熊野屋敷遺跡第 5 次調査）

（1） はじめに

調査は平成 23 年 7 月 5 日から行い、平成 23 年 7 月 15 日に遺跡全体の写真撮影終了後に現場引渡しを行った。調査区現況は竹林であり、調査区は納骨堂建設部分を設定した。遺構の掘削は表土から遺構面までを（有）徳光建設（代表　橋爪徳光）に委託し、遺構面からは地元作業員による手作業の掘削を行った。

調査区の設定は、納骨堂建設箇所の現況が南北と東西に延びる土塁部分及びその内側（境内）であるため、土塁部分についてはトレンチを設定し断面観察を行った。したがって、調査区及びトレンチ①・②という設定を行っている。

（2）基本土層

層位は、約 30 ㎝～ 70 ㎝の堆積土（竹の根で撹乱されている）下に黄茶色土の地山を確認し、地山に切り込む形で遺構を検出している。遺構は溝を確認した。

Fig.2　調査地点位置図（1/5000）

（3）検出遺構

溝

5SD1（Pla.3・4）

調査区を東西に走る溝で、検出長約 6.7 m、幅約 0.9 m、深さ約 1.0 m～ 1.3 mを測り、断面が逆台形の溝である。北側の土塁の内側（境内側）に並行する溝であり、土塁が屈曲する北東隅部分で立ち上がり、南北溝である 5SD5 と接続する。遺物は土師器坏、陶器片、丸瓦、平瓦、火葬骨を出土している。

5SD2

トレンチ②で検出した溝で、5SD5 と同一の溝と考えられる。検出幅約 0.5 m、深さ約 0.3 mを測り、断面が U 字状を呈する。埋土は暗茶色土である。遺物は土師器坏 × 皿片、土師質瓦片を出土している。

5SD3

トレンチ①で検出した溝で、南北土塁の外側（境内外）を南北に走る。トレンチ②の 5SD4 と同一の溝であると考えられる。検出幅約 2.6 m、土塁側からの深さ約 1.3 mを測り、外側（境内外）は土塁の傾斜に合わせて緩やかに立ち上がる。遺物は土師器坏、小皿（灯明皿）、土師質軒丸瓦、平瓦、銭を出土している。

5SD4（Pla.16）

トレンチ②で検出した溝で、南北土塁の外側（境内外）を南北に走る。検出幅約 1.4 m、深さ約 0.7 mを測り、断面は緩やかな U 字状を呈する。遺物は軒丸瓦片、平瓦片を出土している。

5SD5（Pla.7）

5SD1 と接続する南北の溝で、南北土塁の内側（境内側）に並行する。トレンチ②検出の 5SD2 と同一の溝であると考えられる。検出幅約 1.0 m～ 1.4 m、最大深さ約 0.55 mを測り、断面が緩やかな逆台形を呈する。遺物は土師器坏、小皿、白磁片、陶器壷片、石塔、火葬骨を出土している。

土塁

5SX10（Pla.5・6・8）

南北に走る土塁で、熊野屋敷遺跡第 4 次調査によって、東西及び南北に展開する土塁「4SX30」として報告されている。以下に 4 次調査の土塁の所見を転載し、第 5 次調査からの所見を述べる。

『筑後市内遺跡群ⅩⅡ』筑後市文化財調査報告書第 95 集　20 頁

4SX30 は 4SD10 の南側に存在する逆 L 字条の土塁を指す。土塁西部は 4SX20 と同様に現代のスロープを基点に東西へ展開し、西端部は隣地境界付近で消失する。東部はコーナー付近で盛土が一旦終息するが南方に向きを変えて展開し、南方へ延びた土塁南端部は現存の納骨堂手前で分断される。西方部分は全長約 10m、スロープより土塁東部コーナーまでの長さは約 50m、コーナーより南方へは 30m が残存する。土塁の断面形状は概ね台形状を呈するが、傾斜は 4SD10 が存在する北斜面は強く、南斜面は北斜面に比べて若干緩やかである。土塁は黄褐色粘質土の比較的安定した地山上に構築されており、黒茶色土を基調とした盛土で構成されており、暗黒茶色土層（2 トレ－ 14 土層）を厚く敷設した上に粘質土ブロックを含む黒茶色系土層が粗く互層し土塁基底部を造り出している。これらを腐植質系土層が厚く覆っているが、版築した状況は窺えず全体的に強固な土層を呈していない。トレンチからの出土遺物は皆無であった。

今回の調査ではこの土塁に 2 箇所のトレンチ（①・②）を設定して、断面観察を行った。

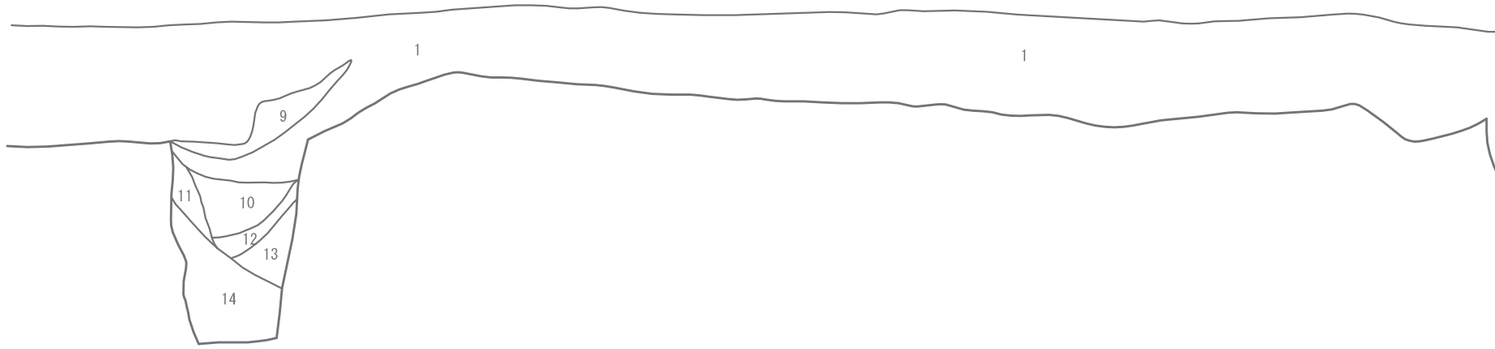
土塁本体については、4 次調査所見と近似するが、盛土中に暗燈色土系の焼土層が確認できる。これは版築等の所産ではなく、盛土する際に混入している。この焼土はトレンチ①・②ともに確認され、一定量が土塁造成段階で境内にあった､もしくは土塁内外の溝に存在していたことを示唆するものである。盛土層については、4 次調査東西土塁は若干違い、南北土塁は腐食土系層と焼土による形成である。また､4 次調査段階では確認できなかった 5SX10（4SX30 南北土塁）の土塁外側の溝を検出することによって、東西及び南北土塁には内外に溝（堀）を備えた施設であった事が明らかになった。

※グレーの地形測量図は第４次調査

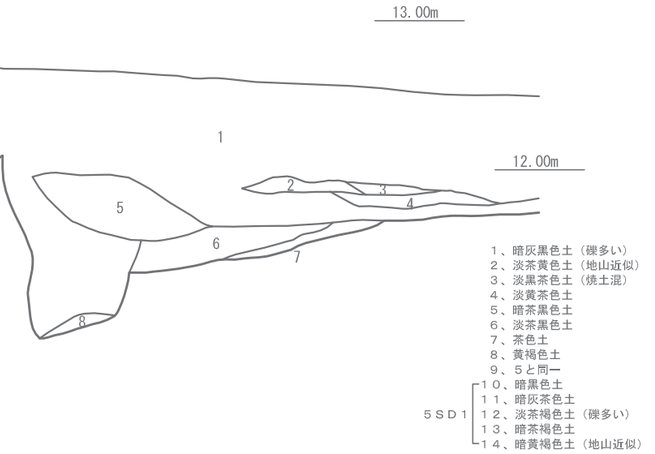
Fig.3　熊野屋敷置跡（第5次調査）地形測量図（1/300）

調査区西壁土層

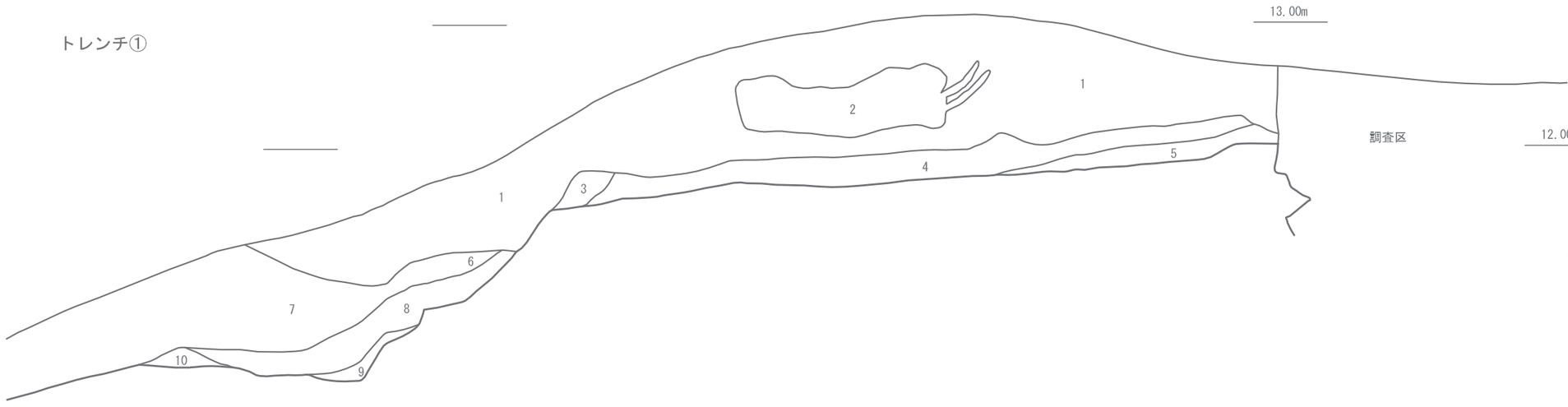
調査区北壁土層



調査区東壁土層



トレンチ①



トレンチ②

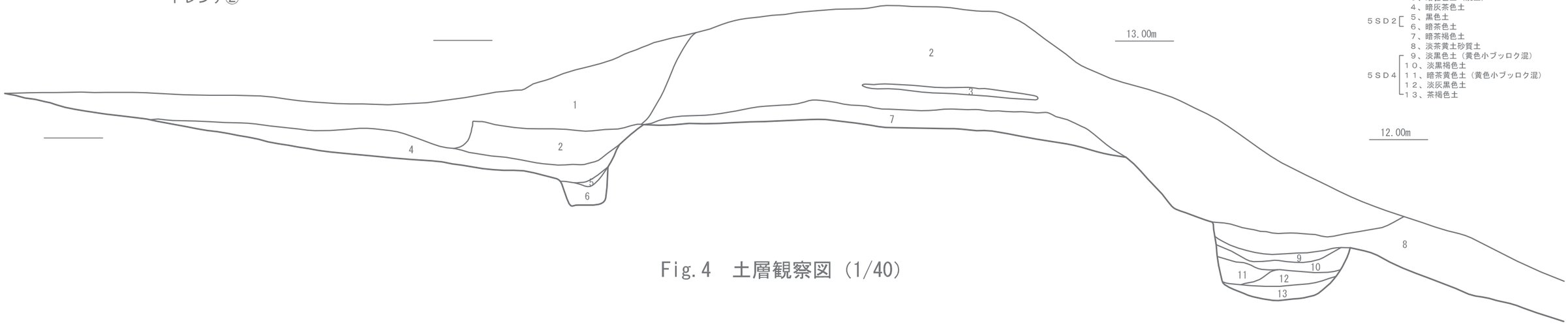


Fig.4　土層観察図（1/40）

（4）出土遺物

5SD1（Fig.5、Pla.18）

土師器

坏（1・2）共に底部回転糸切り、体部調整はヨコナデ、胎土に微量の角閃石を含む。2 は体部外面には轆轤水挽き時の稜が残る。

土製品

瓦（3）土師質の丸瓦で外面に縄目､内面に布目及びヘラケズリ痕が残る。胎土に 5mm 程の砂粒を含み、黄橙色を呈する。水田焼の瓦の可能性がある。

5SD3（Fig.5、Pla.17）

土師器

小皿（4・5）4・5 共に灯明皿で口縁部に油煙が残る。底部回転糸切り、調整はヨコナデ、体部器壁は薄く黄橙色を呈する。

土製品

軒丸瓦（6）土師質の瓦で巴紋を施す。胎土は 5mm 程の白色砂粒及び 3mm 程の赤色砂粒を含む。橙色を呈し、焼成はやや不良である。

金属製品

銅銭（7）寛永通宝で直径 2.5cm を測り、新寛永通宝であると考えられる。

5SD5（Fig.5、Pla.18）

土師器

小皿（8・9）共に小皿で 1 は器高が低く扁平で、2 は口縁部に油煙が残る。底部回転糸切り、調整はヨコナデ、黄橙色を呈する。

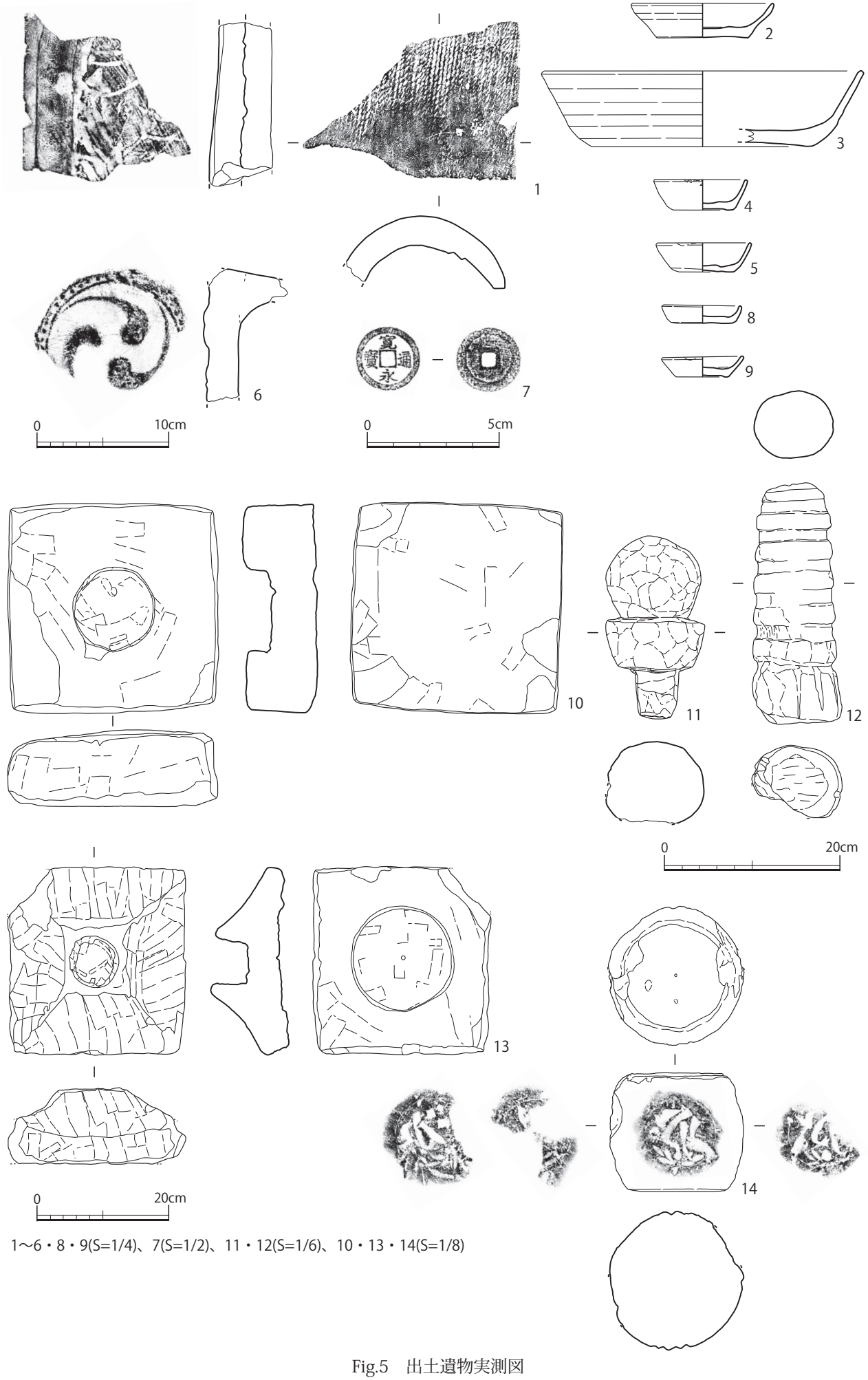
包含層

石製品

石塔（10 ～ 14）全て凝灰岩製である。10 は五輪塔の空・風輪で頂部を宝珠形に仕上げる。11 は宝塔の相輪。12 は火輪で頂部に差込みの抉りを入れ、底部裏面に径 6mm 程度の穿孔を施す。13 は水輪で 4 面に梵字を施し、梵字内部には赤色の顔料を塗布している。14 は地輪で中央に差込みの抉りを施している。

Tab.2　遺物観察表

遺構	S-番号	Fig.	番号	R番号	器種	器形	口径	底径	器高	残存	備考
5SD1	1	5	1	2	土師器	坏	(10.8)	(7.0)	2.6	片	
5SD1	1	5	2	3	土師器	坏	(24.4)	(16.7)	5.7	1/3	
5SD1	1	5	3	1	土製品	瓦				片	土師質：水田焼か
5SD3	3	5	4	4	土師器	小皿	7.1	4.7	2.3	完形	灯明皿
5SD3	3	5	5	5	土師器	小皿	7.2	4.9	2.2	完形	灯明皿
5SD3	3	5	6	6	土製品	丸瓦				瓦当	土師質：巴文
5SD3	3	5	7	7	金属製品	銭				完形	寛永通宝
5SD5	5	5	8	8	土師器	小皿	6.0	4.8	2.35	口縁1/3欠	
5SD5	5	5	9	9	土師器	小皿	6.2	4.0	1.6	口縁一部欠	灯明皿
遺構	**S-番号**	**Fig.**	**番号**	**R番号**	**器種**	**器形**	**器高**	**最大径**	**底径**	**残存**	**備考**
包含層	包含層	5	10	11	石製品	石塔	20.8	11.2		完形	凝灰岩製：空・風輪
包含層	包含層	5	11	12	石製品	石塔	27.4+	10.1		一部欠	凝灰岩製：相輪
包含層	包含層	5	12	14	石製品	石塔	18.0	22.0	14.8	ほぼ完形	凝灰岩製：火輪　4面に梵字あり
包含層	包含層	5	13	13	石製品	石塔	11.55	28.4	27.0	ほぼ完形	凝灰岩製：水輪
包含層	包含層	5	14	10	石製品	石塔	11.6	31.8	31.5	ほぼ完形	凝灰岩製：地輪

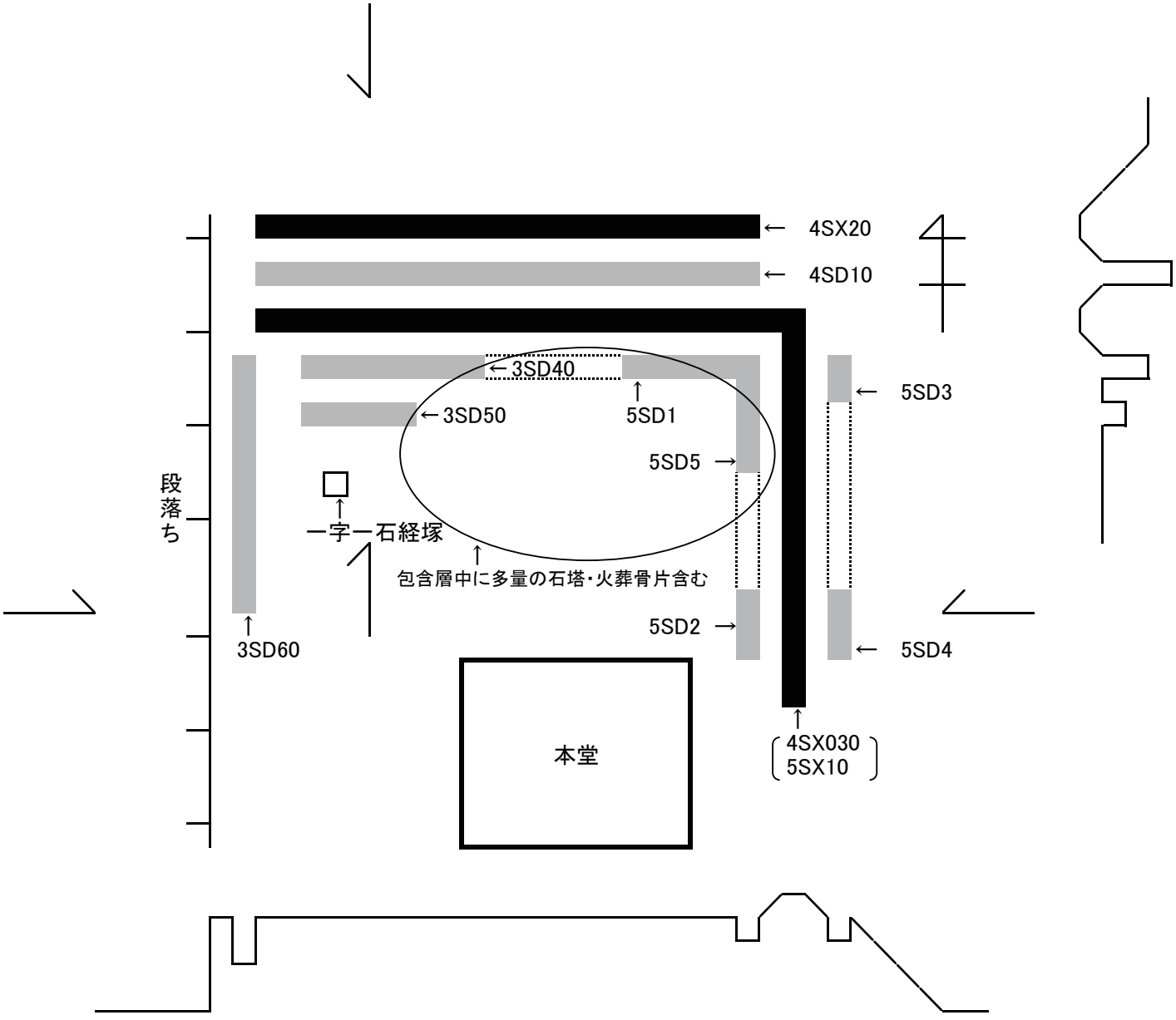


1～6・8・9(S=1/4)、7(S=1/2)、11・12(S=1/6)、10・13・14(S=1/8)

Fig.5　出土遺物実測図

Ⅳ. まとめ

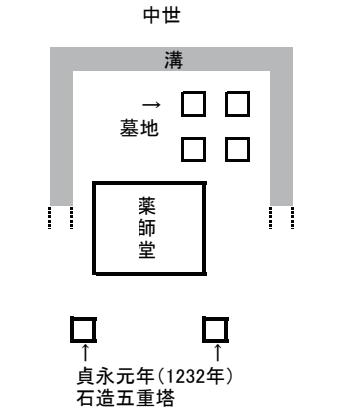
坂東寺境内での埋蔵文化財発掘調査は今回で３度目となる（熊野屋敷遺跡第３～５次調査）。坂東寺境内では、発掘調査が行われる以前から現在の寺域の北辺と東辺に土塁が存在しており、北辺には東西に走る２条の土塁間に溝（堀）があり、東辺は南北に走る１条の土塁から寺域外へ傾斜している様子がうかがえた。地形的には本堂を中心として北辺は緩やかに北に向かって傾斜し、西・東・南辺は段落ちの地形である。したがって、現在の坂東寺境内は周辺地形からみると小高い台地上に展開していることがわかる。これは地形自体によるものと、中世末以降の幾度かの整地によって形成されたものである。土塁全体は調査前段階では竹林により全体像が確認できなかったが、３度の本調査により土塁等の全体像が明らかとなった。以下に検出された土塁及び溝（堀）それに付帯する施設等や出土遺物についてまとめる。

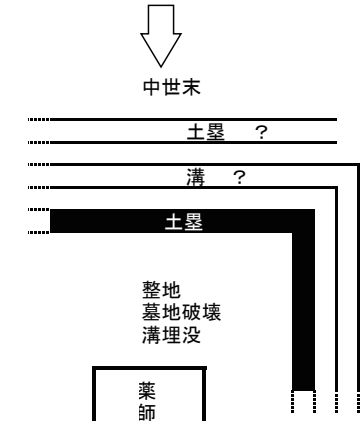


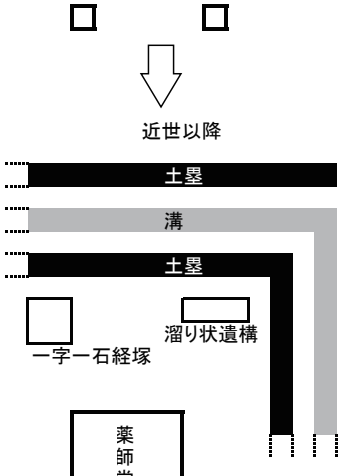
坂東寺境内（熊野屋敷遺跡第3次～第5次調査）　主要遺構模式図

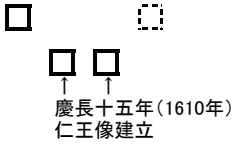
今次調査では、新たに 5SD1、5SD5 を確認したことにより、本堂北側の土塁内側３面（北・西・東）に溝が巡っていたことが明らかとなった。また、東側土塁（5SX10) は、現況では土塁頂点から東側へ緩やかに低くなる地形であったが、その斜面上に 5SD3・4 の溝が巡っていることを確認し、北面の 4SD10 が土塁と同様に逆Ｌ字状に展開し 5SD3・4 へ繋がっていた可能性を示唆するものである。

今次調査の成果から構造物の変遷について下記に図示する。







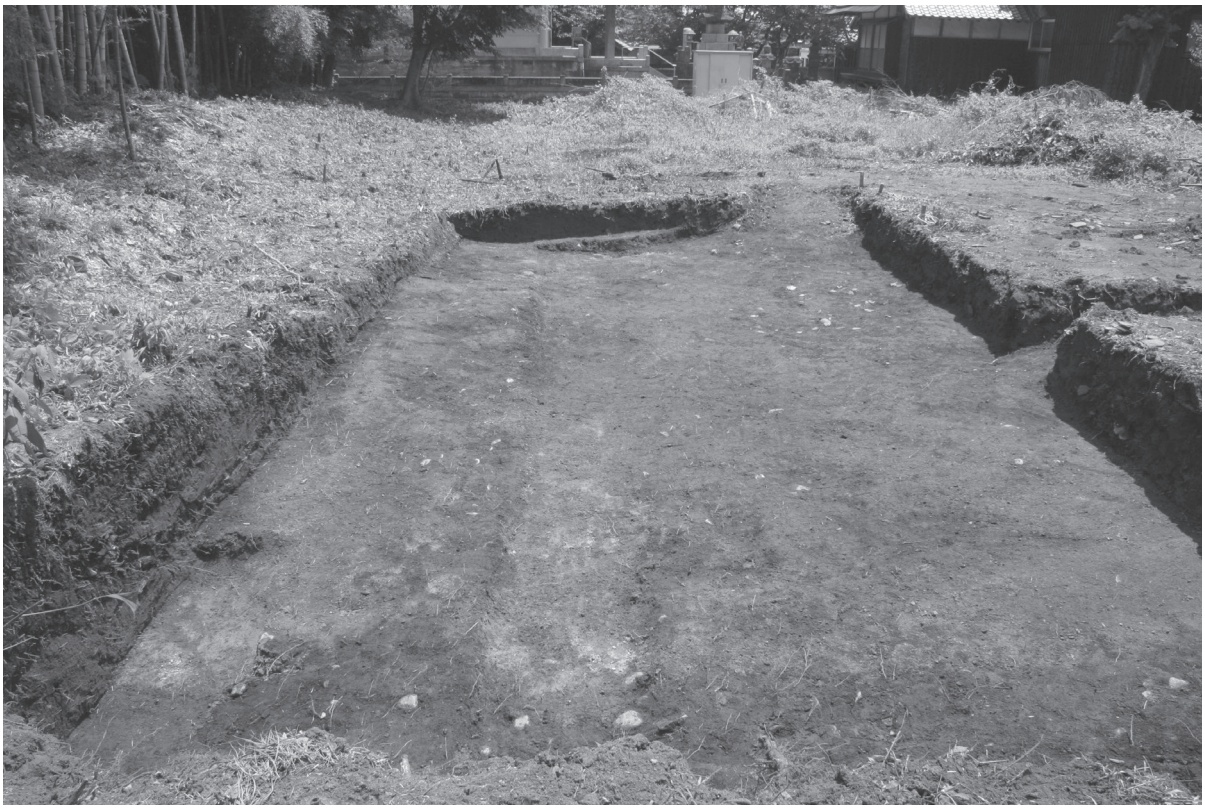


坂東寺関連史（概要）

天承元年	1131年	元弘四年（1334年）広川荘荘官等連署状写に広川荘成立と記載
保延四年	1139年	元弘四年（1334年）広川荘荘官等連署状写に侍賢門院が熊野山に領家職を寄進と記載
元仁元年	1224年	宣陽門院所領目録に門院の御祈願所に当てられる御領に広川荘が記載される
貞永元年	1232年	石造五重塔（県指定文化財）に貞永元年の銘あり
天福二年	1234年	広川荘名田所役注文写に坂東寺と記載
延応元年	1239年	熊野神社鳥居立注文写に大工坂東寺住人藤四郎と記載
正応三年	1290年	広川荘坂東寺の坊地・講経田は寺僧以外の相伝を禁ずる令がでる
元弘三年	1333年	元弘四年（1334年）広川荘荘官等連署状写に合戦により社殿が火災、文書等が焼失と記載
明応元年	1492年	坂東寺成就院法印信覚により坂東寺縁起が書かれる
天正十一年	1583年	『筑後国史』に戸次道雪、高橋紹運らが坂東寺を焼討したと記載されるが、史実であるかも含め詳細は不明
天正十二年	1584年	『上井覚兼日記』に大友勢（戸次・高橋）は坂東寺に着陣していると記載
天正十三年	1585年	戸次道雪が病死したため、高橋ら筑後から撤退する
天正十四年	1586年	島津勢が筑後を制圧
天正十五年	1587年	秀吉が島津征討
		太閤国割りにより、坂東寺を含んだ上妻郡を筑紫広門が与えられる
		筑紫広門により、荒廃した坂東寺を再興する
		久留米藩主毛利秀包が坂東寺鐘楼、南大門、本坊、坊舎、寺田等を没倒収奪し無住の寺として荒れる
慶長六年	1601年	田中吉政が筑後国領主となり、寺領の寄進を行い再興
慶長十五年	1610年	田中吉政が仁王像建立
延宝三年	1675年	『北筑雑藁』に坂東寺の鎮守社として熊野神社が勧請されたと記載
天和二年	1682年	『筑後地鑑』に坂東寺村と記載
天保三年	1832年	久留米藩9代藩主有馬頼徳により東塔持出し
明治二年	1869年	神仏分離令が出され、坂東寺は破却、住僧は熊野神社の神官となる

写真図版

Pla.1 調査前状況（南西から）



Pla.2 調査区全景（北から）

Pla.3　5SD1 完掘状況（東から）

Pla.4　5SD1 土層断面（東から）

Pla.5 南北土塁 5SX10 検出状況（北西から）

Pla.6 南北土塁 5SX10 検出状況（北から）

Pla.7　　5SD5 完掘状況（北から

Pla.8　南北土畳 5SX10 検出状況（南から）

Pla.9　トレンチ①②検出状況（西から）

Pla.10　トレンチ①土層観察（北西から）

Pla.11　トレンチ①外側（東側）土層観察（北西から）

Pla.12　トレンチ②検出状況（西から）

Pla.13　13 トレンチ②土層観察（南から）

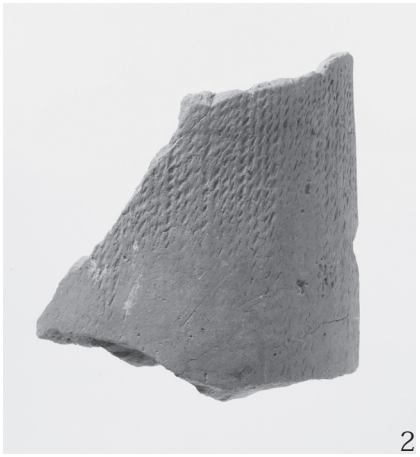
Pla.14　トレンチ②土層観察（南西から）

Pla.15　トレンチ②外側（東側）土層観察（西から）

Pla.16　5SD4 土層観察（南から）

Pla.17

1

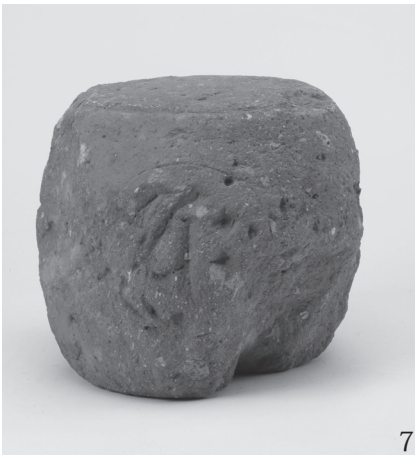

2

3

4

5

6


7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

筑後市文化財調査報告書　第 101 集

熊野屋敷遺跡

平成 24 年 3 月 31 日

発行　筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井 898

TEL　0942-53-4111

印刷　筑後市教育委員会

福岡県福岡市博多区山王一丁目14-4

TEL　092-475-6271